

様式(7)

報告番号	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px; display: inline-block;">甲 保</div> 第 3 2 号 乙 保
論文内容要旨	
氏 名	板東 孝枝
題 目	Treatment-associated symptoms and coping of postoperative patients with lung cancer in Japan: Development of a model of factors influencing hope (術後肺がん患者の治療に伴う症状, Coping, Hopeの影響要因モデルの開発)
<p>【研究目的】 Hopeは、がんの経験を通して、心理生理的防御の両方として不可欠な生命の力として表現されている(Herth 2000 et al). 本研究では、術後肺がん患者のHopeに焦点を当てたケア視点の示唆を得るために、術後肺がん患者の治療に伴う症状、対処、支援を主要変数としたHopeへの影響要因モデルを作成することを目的とする。</p> <p>【研究方法】 Hopeの測定は、Herthによって開発されたHerth Hope Indexを使用した。治療に伴う症状の評価は、The European Organization for Research and Treatment of Cancer Quality of Life Questionnaire Lung Cancer Module (QLQ-LC13)、対処の測定は、「ストレス状況対処行動尺度」であるCISS (Coping Inventory for Stressful Situations) 日本語版を使用した。医療者からの支援として、「医療者の術後症状管理に対する満足度」「医療者から与えられる情報に対する満足度」等の4項目を設定し、ソーシャルサポートの測定は、「がん患者用ソーシャルサポート尺度を使用した。</p> <p>分析方法は、Mann-Whitney U test, Kruskal-Wallis testを行い、各変数間の関係はSpearmanの順位相関係数を用いた。単変量解析と相関において有意な関係がみられた変数を独立変数とし、Hopeを従属変数とした重回帰分析を行った。最終的に本研究の枠組みに基づいた変数間の関係をみるために、単変量、相関、重回帰分析の結果を参考に初期モデルを設定し、モデルの適合度を共分散構造分析で算出した。徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認を得た (1719-1)。</p> <p>【結果および考察】 対象者90名は、66.0±8.0歳であった。「Hope」を従属変数として、術後6ヵ月まで持続する可能性がある咳嗽、呼吸困難、胸部の痛み (Bando, 2015) の3症状と、単変量解析を行い、Hopeの高低別で有意差がみられたものを独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行い、最終的なモデルを採用する際には、肺がん手術療法後患者のケア視点の示唆を得るために、治療に伴う症状及び支援からHopeへの影響を重視して、モデルの改良を行った。</p> <p>「Hope」と「治療に伴う症状」の関係では、「呼吸困難」、「口舌のあれた感じ」、「胸部の痛み」の3症状が「Hope」に負の影響を与えていた ($B=-0.36, P=0.039$)。「医療者の症状管理に対する満足度」、「医療者から与えられる情報に対する満足度」、「治療・療養過程における看護師への信頼」の3支援から、「Hope」に対する直接的な影響はみられないが、「支援」は、「治療に伴う症状」に負の影響を与えており ($B=-0.58, P=0.000$)、「治療に伴う症状」の改善が「Hope」に影響を与えた ($B=-0.36, P=0.039$)。また、「課題優先対処」と「気晴らし」の「対処」は、「Hope」に正の影響を与えた ($B=0.57, P=0.005$)。「Hope」に対しては、対処 (推定値=0.570) が、「治療に伴う症状」 (推定値=-0.356) よりも大きな影響を与えていた。本研究の知見として、肺がん手術療法後患者のHopeへの影響要因が明らかになったことは、具体的なケアの手がかりが得られ、生命の質はもとより、生命の量にも影響する重要な援助の視点が得られた。これは生存率や治癒率を超えた視点から、がん体験者としてより豊かにその人の人生を生きるための具体的なケアの手がかりが得られたといえる。</p>	